樹木や柱の信仰 1)
－縄文時代における信仰の一側面－

岩田　安之
（青森県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室）

I. はじめに

樹木や柱を聖なるものとしてまつる行為は、人間の信仰の中でも最も初源的なものの一つであろう。天高くのびる巨木や、幹に大きく穴をあけた異様な木、大きな柱などは、人間の想像力を刺激し、超自然的な象徴としてとらえられてきた。現在でも、樹齢 100 年を超えるような古木や巨木、奇怪な形態の木などは御神木などとして広く信仰の対象となっている。

ユングは神話や象徴が世界中のさまざまな文化において時代を超えてよく類似していることは、人間の心にすり込まれている「集合的無意識」というものがあることで説明ができるとし、文化による変異は属性レベルの話であるとした［ユング 1975］。このような考え方は、評価は別にして、構造主義における一つの社会の解釈方法にも類似する。各地や各時代における信仰には変異がみられても、土台となる構造には変わりがなく、根本には人間の普遍性というものが存在しており、分類の網目（構造）をずらすことによって、文化の違いが説明できるという考え方である。

信仰について考察する際にも、このような考え方は適用して解釈できる可能性がある。人間の意識にある普遍性の探求という点で、本稿で扱う樹木や柱の信仰は、時空を超えて、考察することができる可能性が高いと考えている。

本稿では、青森県を中心に縄文時代の樹木や柱の信仰を考察する。まず宗教学や民俗学で考察されている樹木や柱に対する信仰を概観し、それを踏まえて考古学的に認められる事例をみていく。最後に、現代の民俗例やアイヌ文化の発掘調査事例と合わせて具体的な信仰の姿を探ってみる。

II. 樹木や柱の信仰

柳田國男は、『神樹篇』で人工の柱と自然の樹木を神が降りるための依り代として、日本各地のさまざまな事例をとりあげて考察を行い、古くから日本では、樹木や柱を拠り所にした信仰が存在していたことを明らかにした［柳田 1990］。

エリアーデは主に神話を資料として樹木（植物）崇拝の類型化を試みているが、それによれば、①石･壇･樹の三幅対の 1 つとしての聖樹、②宇宙そのものの象徴、③神の顕現、④生命（多産豊穣不死）の象徴、⑤世界の中心、⑥人間とのつながり（人間を生む木、木の結婚など）、⑦復活・再生の象徴（キリスト教の「五月の木」など）、があげられている［エリアーデ 1968］。

小川直之氏は、信仰される樹木を日本各地の事例から、①依代としての神樹、②樹下託宣の神樹、③卜占を行う神樹、④結界表象としての神樹、⑤族霊としての神樹、⑥森神を形成する神樹の、7 つの類型に分類している［小川 2012］。

エリアーデや小川氏などはこのように分類しているが、信仰される樹木や柱には、これらの要素が複合的に付加されている可能性が高い。聖なるものとされた樹木は、神であり、宇宙の中心であり、地中と地上、天を結ぶもの、再生の象徴などとして信仰されるものである。

滋賀県の野神信仰は、野神といわれる大木周辺で行われる一連の儀礼行為で、水田や村の入口、村はずれなどにある巨木やこんもりとした森を中心に営まれる信仰形態である［李 2011：10 頁］。東アジアの農耕社会に共通する農の神を祀る儀礼と考えられている。

いずれにせよ、人間が樹木に聖性の象徴を与えてそれを媒体にしてまつりを行う事例は、どの地域・時代にも共通にみられる人間の集合的無意識の表れの一つであると考えられる。

III. 遺跡にみられる痕跡

～縄文時代の樹木や柱の信仰（図 1）

Ⅱでは、樹木などの信仰は人間にとって一般的なものであり、どの時代にも地域にもみられることを確認

した。この前提からは、縄文時代にもそのような信仰があったことが仮定される。縄文時代にはどのような樹木や柱の信仰がみられ、その具体的な姿はいかなるものであったのか。ここでは、調査された遺跡にみられる樹木などの信仰の痕跡を考えてみたい。

風倒木痕として遺跡調査時に扱われる遺構や痕跡がある。よく後世の撹乱などとして処理されるが、確証がないままのものもある。しかし風倒木痕周辺には遺物が集中する例がみられ、その中に特殊な遺物もみられる場合もある。ここでは、風倒木痕を当時、樹木が信仰されていた痕跡と積極的にとらえ、周辺に集中あるいは風倒木痕から出土する遺物は、それらを用いた縄文時代の人々が樹木周辺で行っていた行為の痕跡と仮定して、当時の信仰を考えてみることにする。また柱に関わる祭祀の痕跡も加えてみていきたい。

①近野遺跡（図２）

風倒木捨て場から縄文時代後期前葉の十腰内Ⅰ式の土器、剥片石器、礫石器が出土している。個体復元可能な土器が多いことから、風倒木痕の上位に縄文時代後期の捨て場が形成されていたと推測されている。人体文が３体線刻された著名な石冠やミニチュア土器、

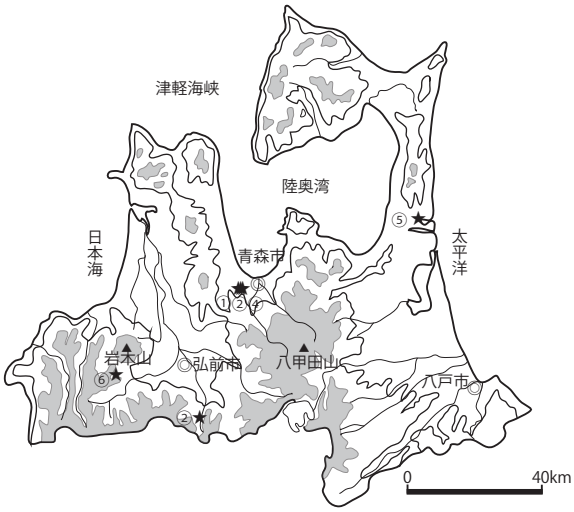


図１　遺跡位置図

土製品など祭祀に関わる遺物も多く確認されている。

②駒木沢遺跡（図４）

亀甲形の掘立柱建物に囲まれるように風倒木痕が確認されている。掘立柱建物の柱穴埋没後には、柱穴上とそれをつなぐように配石がなされる。風倒木痕を取り囲むようにウッドサークルや配石がなされている状況とも考えられる[2)]。

また、盛土の近くにも風倒木痕が確認されている。

③三内丸山 (6) 遺跡（図５）

第２号掘立柱建物ピット１～５が埋められた後に遺物が集中している状況が確認されている。遺物は中期中葉、円筒上層ｄ・ｅ式の土器、石棒１点、石皿１点、台石２点、北海道式石冠１点、三角柱状石製品１点が出土している。

同掘立柱建物ピット６の廃絶後にも遺物が集中した状況が確認されており、中期中葉、十腰内Ⅰ式土器、土偶１点が出土している。

第１号掘立柱建物ピット４にも中期中葉の土器の集中がみられる。

④石江遺跡（図７）

第 17 号竪穴住居跡の北西コーナーを壊すように風倒木痕が確認されている。この住居跡は、方形で壁柱穴が巡り、中央の炉周辺に多くの柱穴が確認されている。覆土からは前期中葉～後葉の土器が多く出土しており、黒曜石の石匙が２個並んで置かれていた。

⑤上尾駮 (2) 遺跡（図６）[3)]

風倒木のくぼ地に配石と小貝塚が形成されている。貝層に後期前葉の十腰内Ⅰ式土器が出土しているため、その時期のものであろう[4)]。

⑥大川添 (4) 遺跡（図８）

風倒木痕から石棒、石皿、後期前葉に属する土偶などが出土している。報告者の一人成田滋彦氏は、人体文石冠の出土した近野遺跡の風倒木痕と類似しているとし、当時の凹みを利用した祭祀行為を想定している（青教委 2014）。

このように、風倒木痕や掘立柱建物の柱を埋めた跡などに祭祀遺物や土器・石器が集中する事例がみてとれる。風倒木痕は、いつの時代か断定できないものやされないものが多いが、それが縄文時代のものと積極的に評価すれば、そこに樹木が存在していた、または樹木や柱が以前にあったことを縄文人が知っていた可能性があるため、そこに何らかの信仰の存在が想定できるかもしれない。三内丸山 (6) 遺跡にあるような、掘立柱の柱穴内やその周辺での遺物の集中も、屹立する柱周辺やその跡で行われた祭祀の存在が考えられる。

このような樹木や柱の信仰というものは、現在から過去においていつの時代にもあると思われるが、縄文

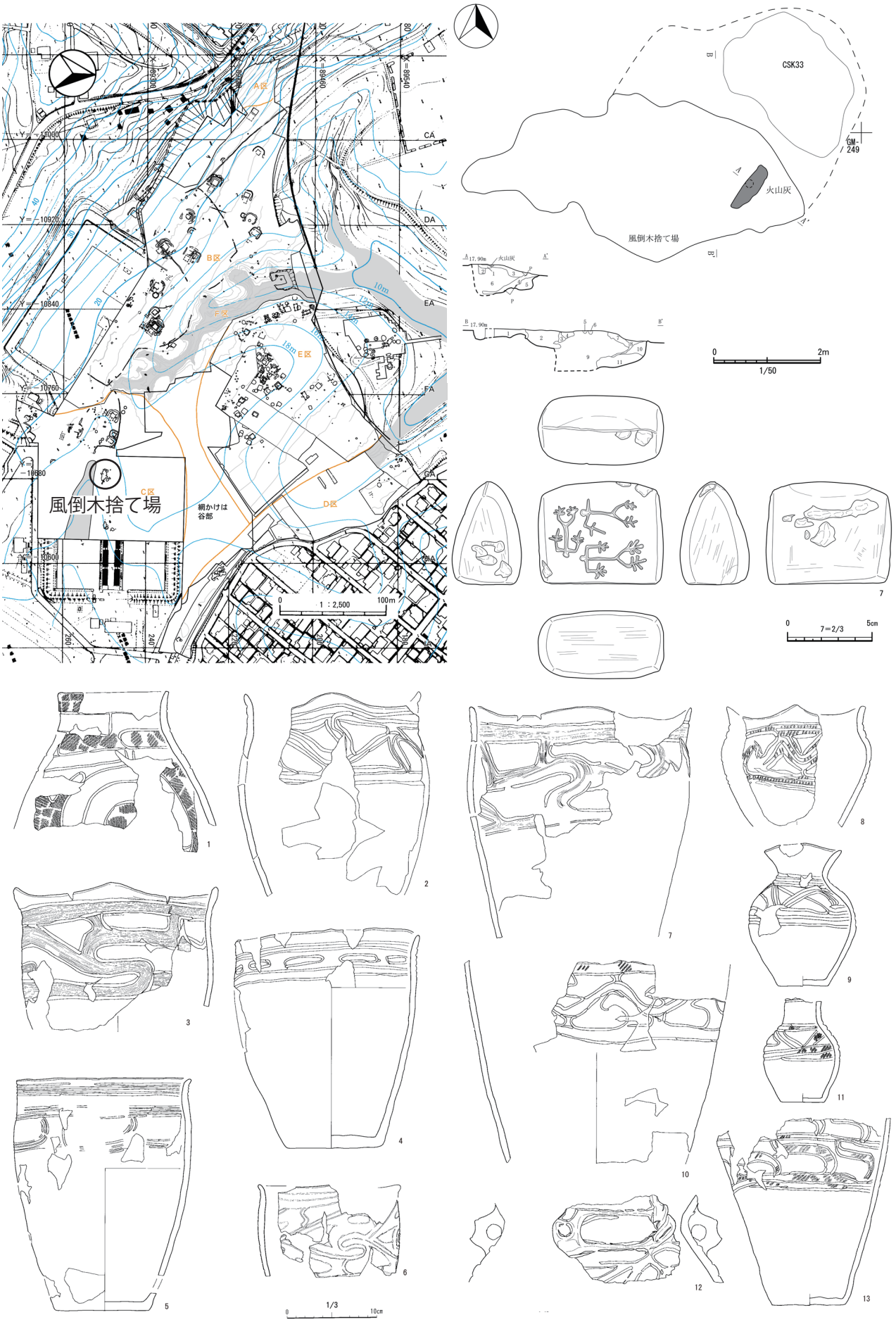


図２　近野遺跡１（青教委 2006）

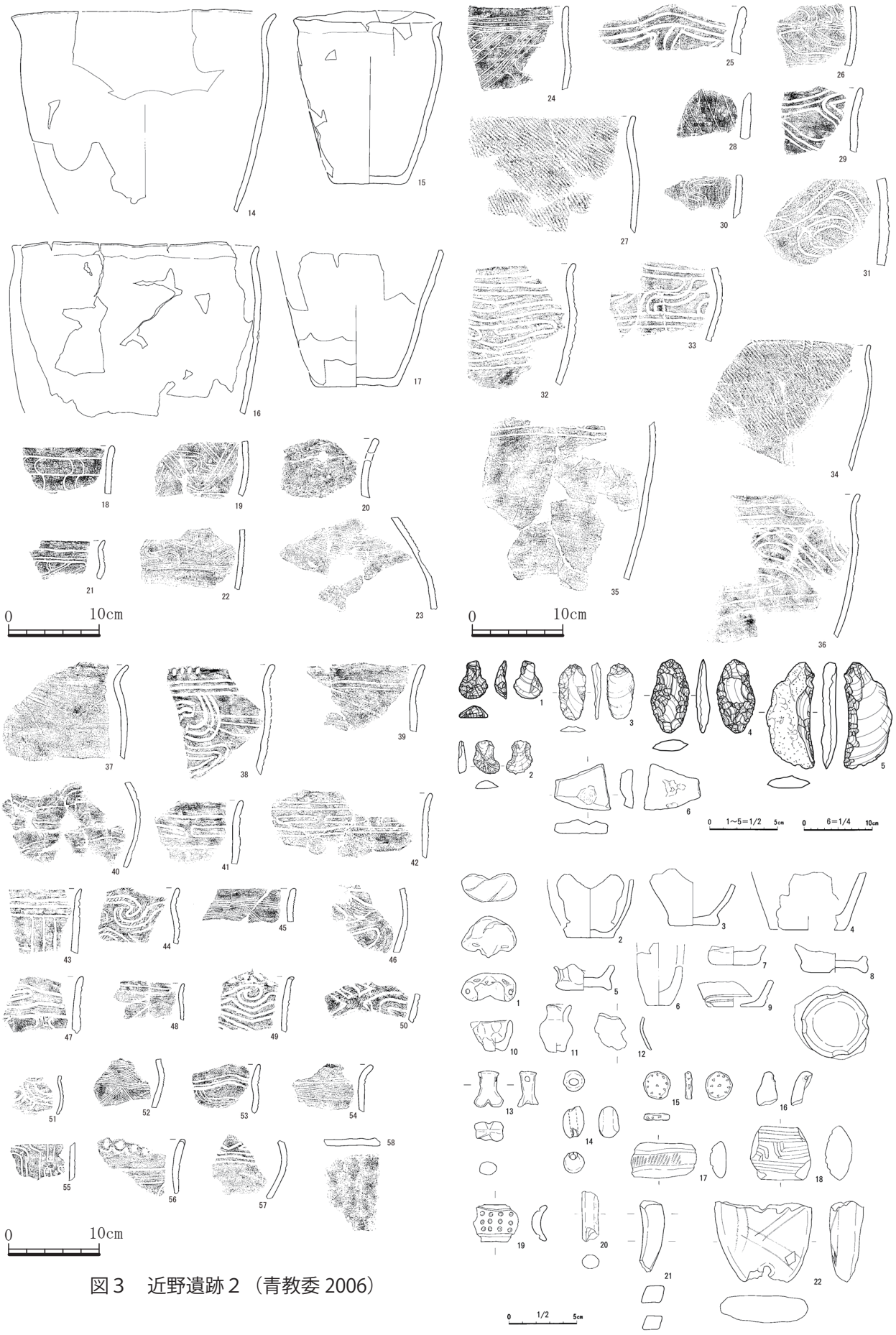


図３　近野遺跡２（青教委 2006）

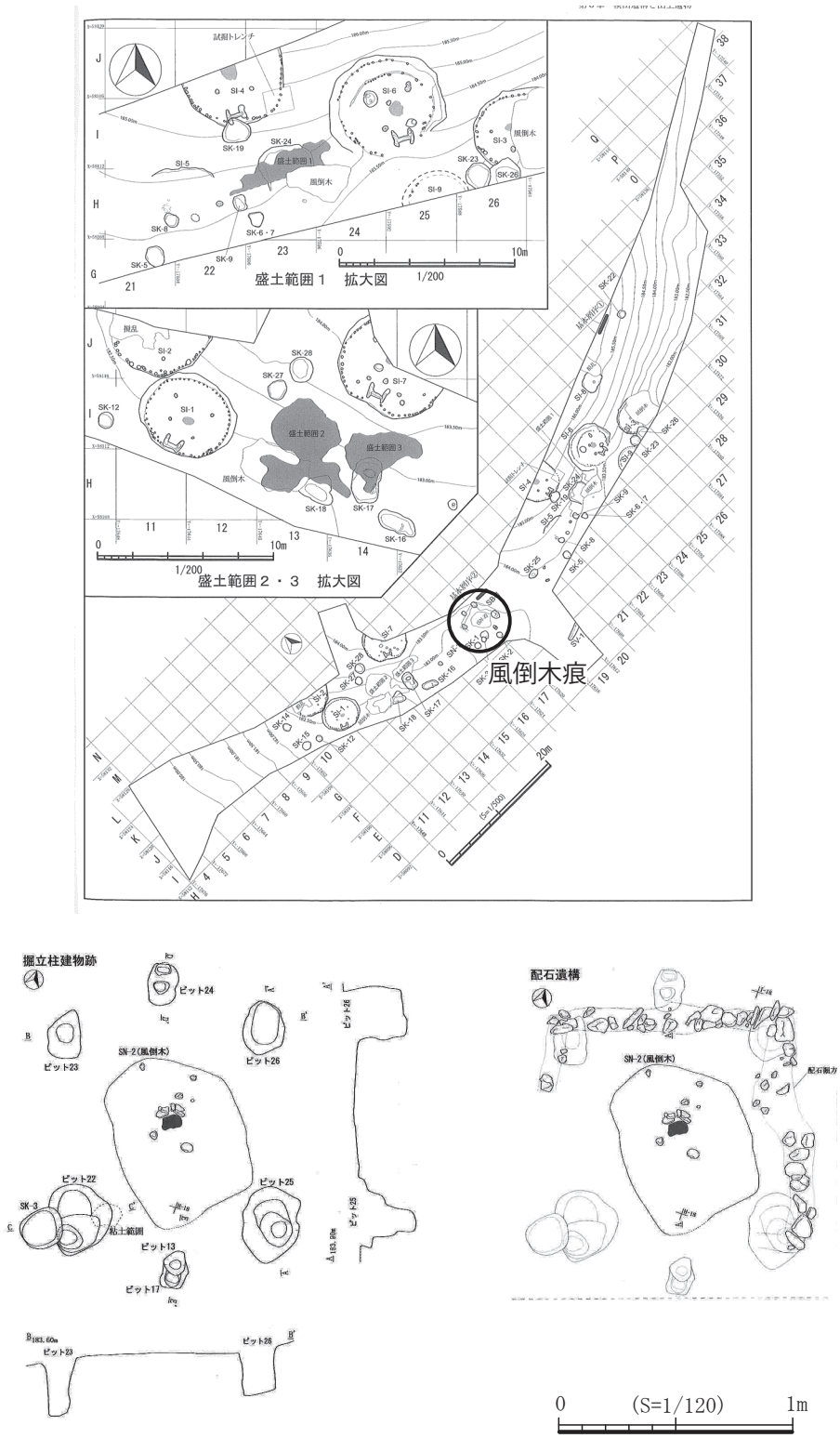
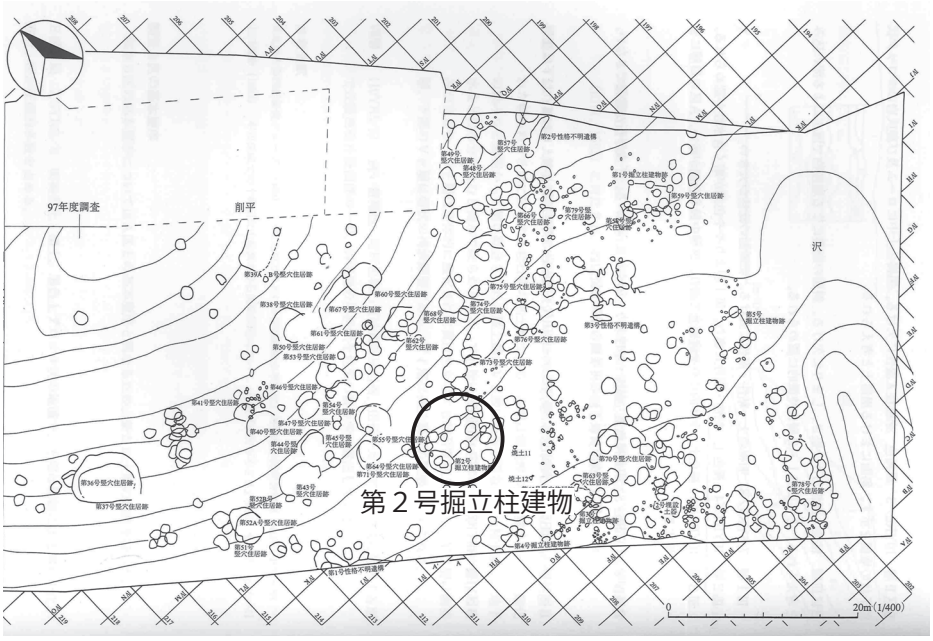


図４　駒木沢遺跡（青教委 2013）



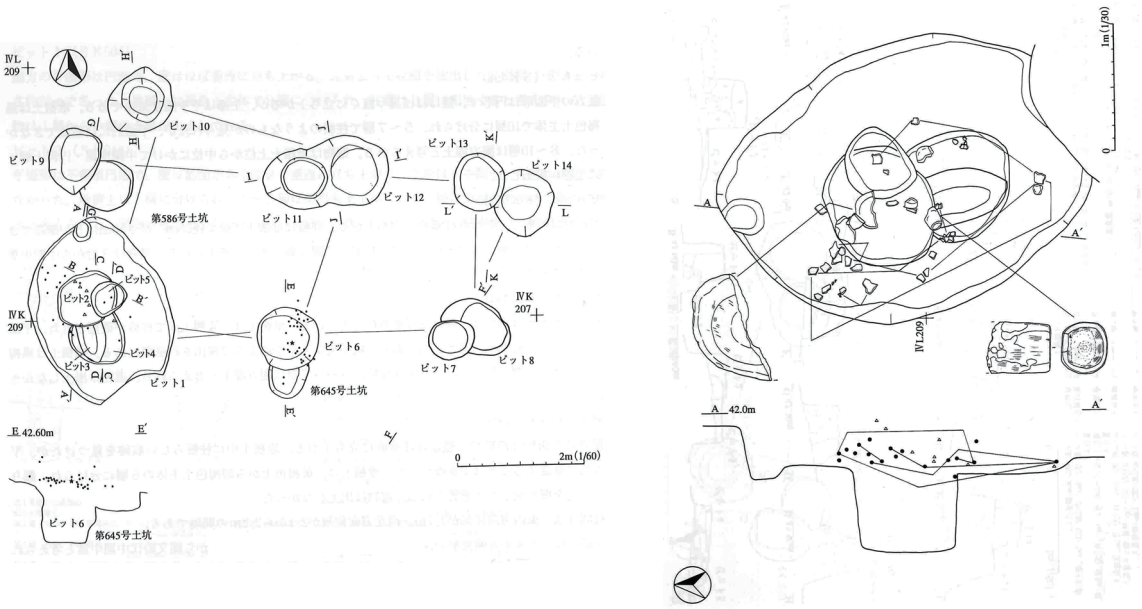


図 5　三内丸山 (6) 遺跡（青教委 2008）

時代の例をみれば、中期中葉から後期にかけての例が多いようである。しかし扱った事例は僅少であるため、今後類例が増えれば、異なった傾向がみえてくるかもしれない。

Ⅳ. 樹木や柱の周辺で何が行われていたのか

考古学的事例には、樹木や柱で祭祀が行われていることを推測させるものがあることをみてきたが、具体的な解釈を行うには民俗学などのアプローチも必要である。

ここでは、民俗学やアイヌ文化期の発掘調査事例を参考にして、縄文時代の樹木や柱の信仰の一端を考察してみたい。

1. 石棒、石冠、石皿など性の象徴に関わる遺物が出土する場合

柳田國男［柳田 1990］は『石神問答』で、日本各地にはサイの神（境界にまつられる防塞の神）が存在

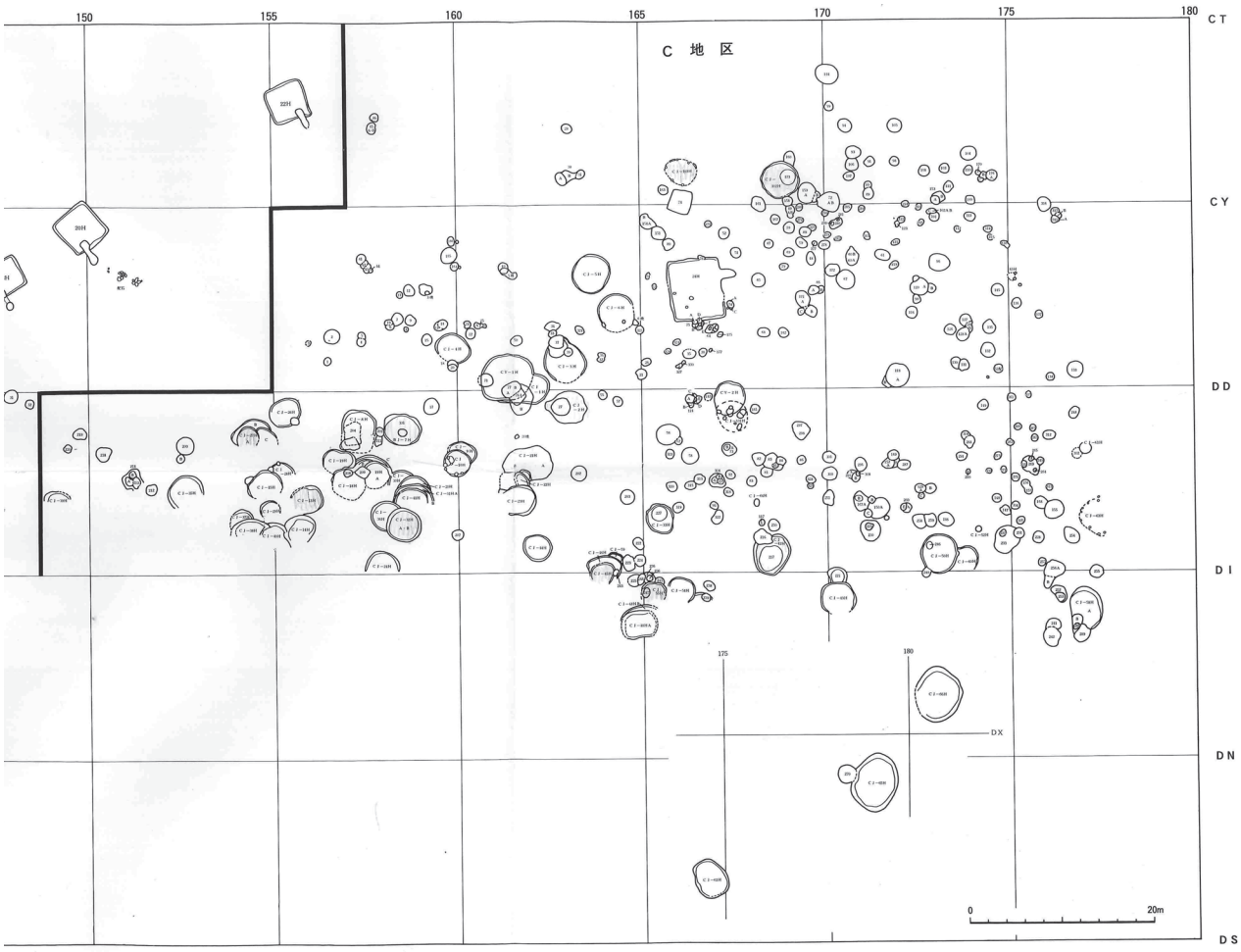
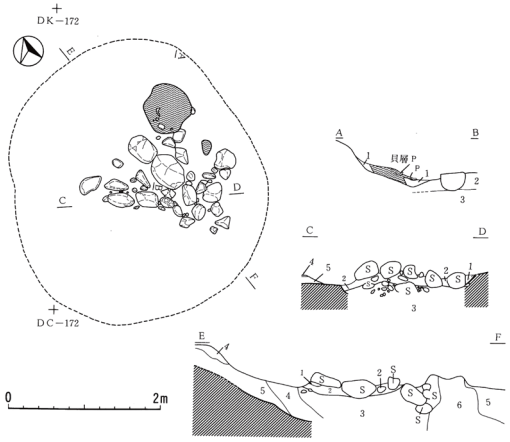


図６　上尾駮遺跡（青教委 1988）



し、石棒など男性や女性の象徴がまつられることを説明している。各地に残る「シャクジ」という地名は、石を拠り所にした神「石神（シャクジン）」ではなく、サイの神（防塞の神）がそこに存在したものであるとした。そこには目印として樹木があったりする。

萩原秀三郎氏は、東アジアの樹木や柱などの信仰を各地の事例から分析している［萩原 2001］。氏によると、諏訪大社の柱神事の中では御杖柱が最も重要な柱で、そこには土着の神であるミシャグジが降ろされるという。ミシャグジは中部山岳地方を中心に関東に広がる道祖神と関連する神[5]で、石棒や石棒と女陰を組み合わせた小祠で表される。またそれが位置する場所は、ムラの境や中心が選定される。境にある場合は外敵をムラに入り込まないように防塞の意味が強調され、中心にある場合は、生殖、豊穣、始祖などの意味が強調される。人間が樹木や柱に込める精神性が分析されている。

萩原氏の論考に加えて、上述した野神信仰では、２つの集落がそれぞれ男神と女神となり、それぞれが１か所にある２本の御神木のもとで出会い儀式が行われ、豊穣や再生が祈られるものがある[6]。

三内丸山 (6) 遺跡や近野遺跡、大川添 (4) 遺跡からは男性の象徴と推測される石棒や女性の象徴と推測さ

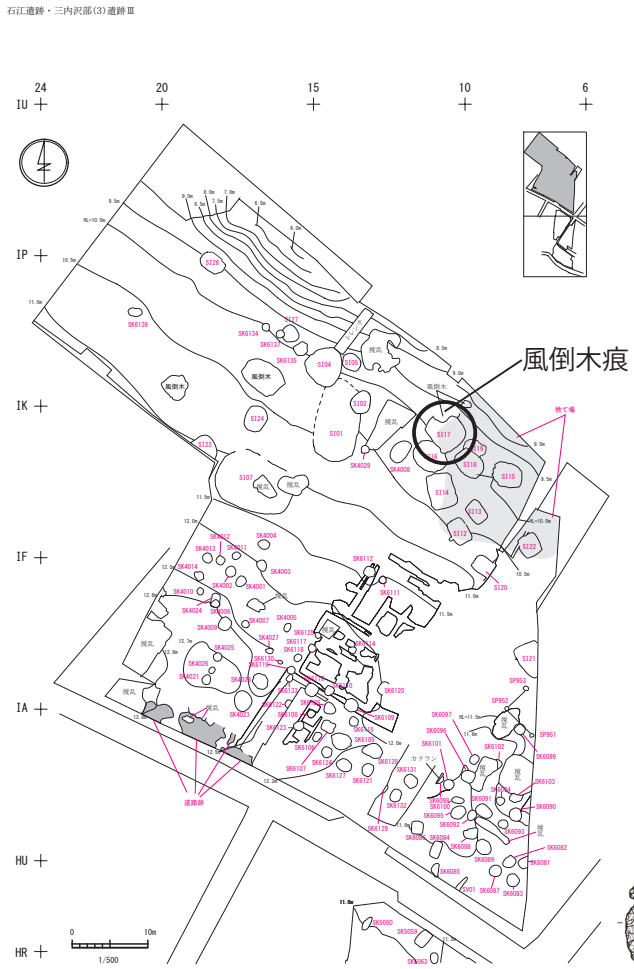
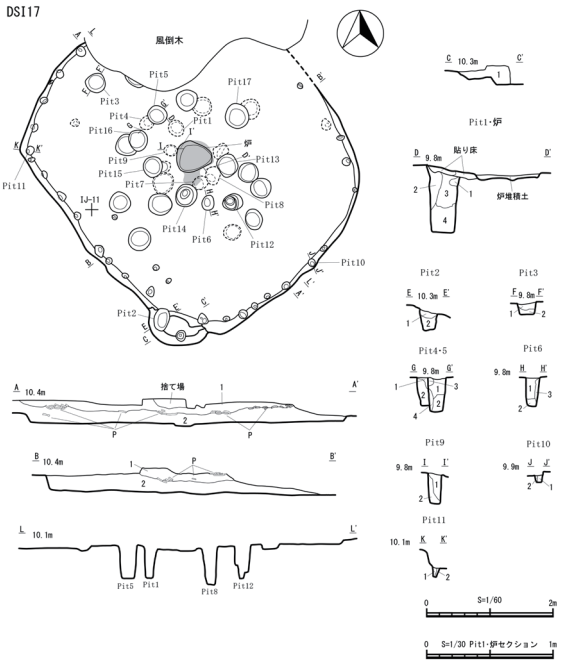
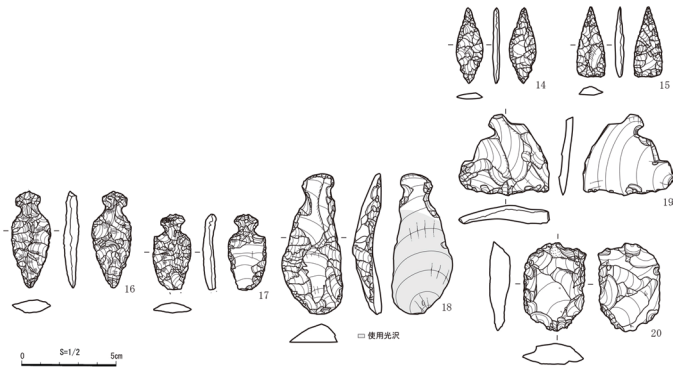
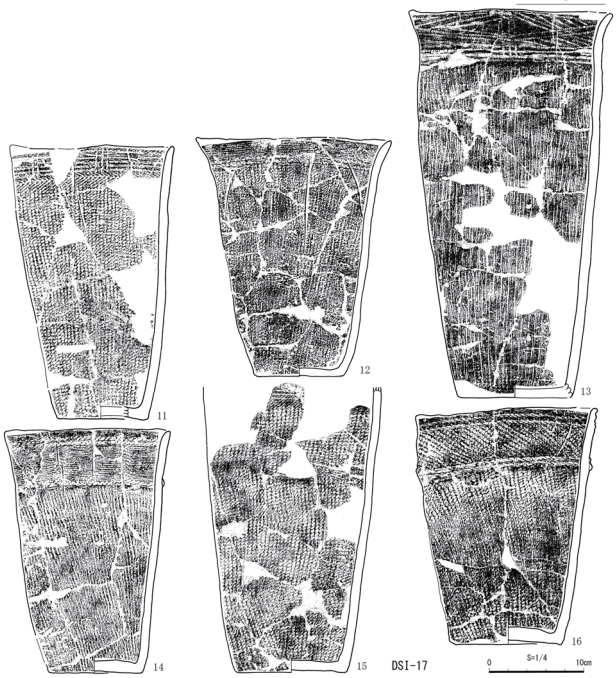


図8　石江遺跡D区遺構配置図（1）







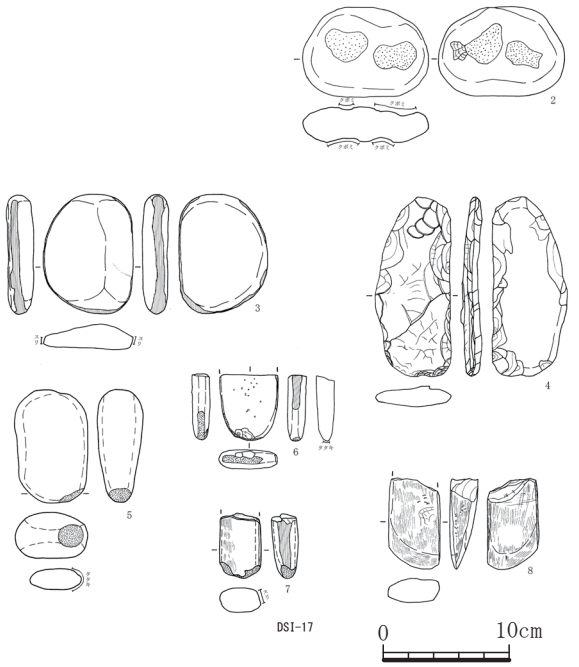


図７　石江遺跡（青教委 2008）

れる石冠・石皿など、男女に関連する遺物の出土が認められる。縄文時代にもそのような信仰があったことが石棒や石冠・石皿など男女を象徴するような遺物から推測することができる。これらの遺構や遺物が集落のどこに位置するのかを詳細に分析することによって、防塞、生殖・豊穣・始祖など、そこで行われた祭祀のあり方を推測することも可能であろう。

2. 樹木や柱周辺で多くの遺物が出土する場合

宇田川洋氏はアイヌ文化期の送り場を調査し、それが行われる場所の時期的な傾向を推定している。アイヌ文化とは、北海道において旧石器、縄文、続縄文、擦文・オホーツク文化に続く 13 世紀の終わり頃から盛行したものである。

宇田川氏はアイヌ文化期の送り場遺跡を分析し、特徴を時期ごとに考察した［宇田川 2001：332 頁］。その結果、以下の７形式に分類されるという。

(1) 御神木となる太い木の根元に位置する例。
(2) 岩や並べた石の付近に存在する例。石積、集石の例も含めておく。
(3) 土籬を有する特殊な例。
(4) 竪穴住居址などの窪地を聖地として利用する例。
(5) 貝塚、貝層を形成している例。貝塚といわれるものも含む。
(6) 岩陰を利用する例。
(7) そのほか平坦地などに何らかの施設も有していない例。

そして、これらの形式は (4) → (5) → (7) → (1)・(6) が基本的な時期的な変遷としてとらえられ、(2)・(3) は特殊なもので全体として数が少ないと述べている。

北海道東部の川上郡標茶町虹別は、名取武光らによって、1939（昭和 14）年に熊送りの儀式が記録されているところであり、いくつかの熊送り場が残されている［宇田川 2001：287］。その調査によると、伊藤剛氏宅付近の送り場は、直径１m弱のカシワナラの根元に、クマ・キツネ・エゾリスなどが送られており、終戦後には 20 頭前後のクマの頭骨が残っていたことも聞き取られている。

ほかにも虹別には送り場があり、その一つは、宇田川氏らによって発掘調査が行われている（図 9）。かつてこのコタンに住んでいた土井コトさんからの聞き取りによると、送り場にはナラの大木があり、これが御神木となっており、その周辺でクマなどの動物を送ったということである。御神木周辺に集中していた７本の仕止め矢は、すべて曲げられ折られている。

このように、アイヌ文化の送り場や現代のアイヌ民族の送り場には、御神木がひとつのきっかけとなっていることが指摘できる。

考古学的事例では、近野遺跡や石江遺跡などのように風倒木内やその周辺には盛土や捨て場が形成されていると考えられる例がみられる。アイヌの送り場遺跡にも御神木であるナラの大木周辺に送り場が形成されていたことは、樹木が神の世界とつながる拠り所となっていたのであろう。縄文時代にも樹木や柱を拠り所にした送り場のあったことが推測される。

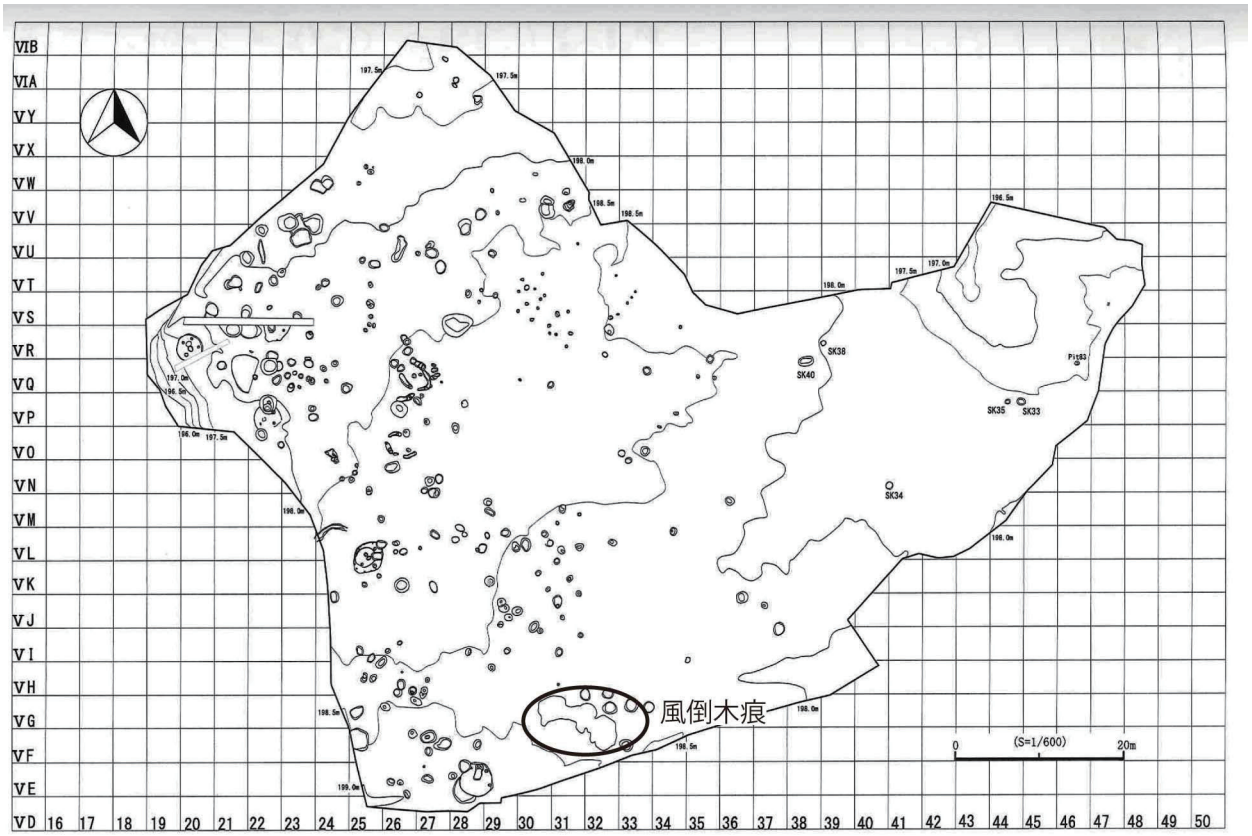
3. 樹木と配石

駒木沢遺跡や上尾駮遺跡の風倒木周辺にある配石の存在は、現在にもみられるように御神木周辺に石を巡らして結界を表出することや、祈りのために石を集めたり積んだりする行為がここで行われたことを推測させる。実例の一つとして、福井県勝山市にある白山平泉寺の御神木周辺には配石が巡らされている（写真１）。配石は、単独で存在するのではなく、樹木や柱を拠り所にした祭祀行為の結果のひとつととらえることもできる。

本稿で扱った風倒木は、明確に縄文時代の遺構と判断することはできないが、その周辺で遺物が集中する事例や特異な遺物が出土する場合は、信仰の対象がそこにあったことを疑う必要もあるであろう。三内丸山 (6) 遺跡で確認されている、柱痕が埋められた後の遺物の出土状況も、柱に対する何らかの信仰を示しているとも考えられる。

V. おわりに

共同体に属する人間は何かの象徴のもとでまつりを行い、それぞれの紐帯を確かめる。これは現在の世界のどこででもみられる行為であり、また過去も同様である。本稿では、青森県に限って縄文時代における樹木や柱に関わる信仰を考察してみたが、大まかに当時にもそのような信仰が存在していたという可能性を指摘するにとどまった。しかも扱った事例が青森県に限られたため、明確な時期的・地域的変異を考察するこ



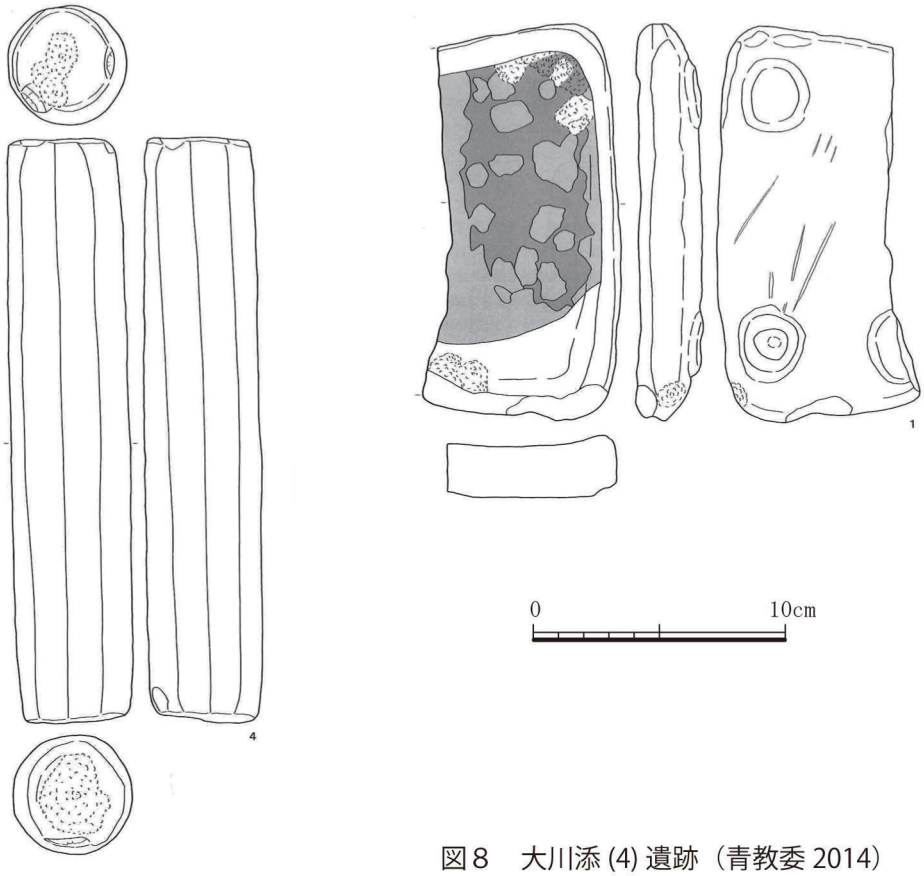
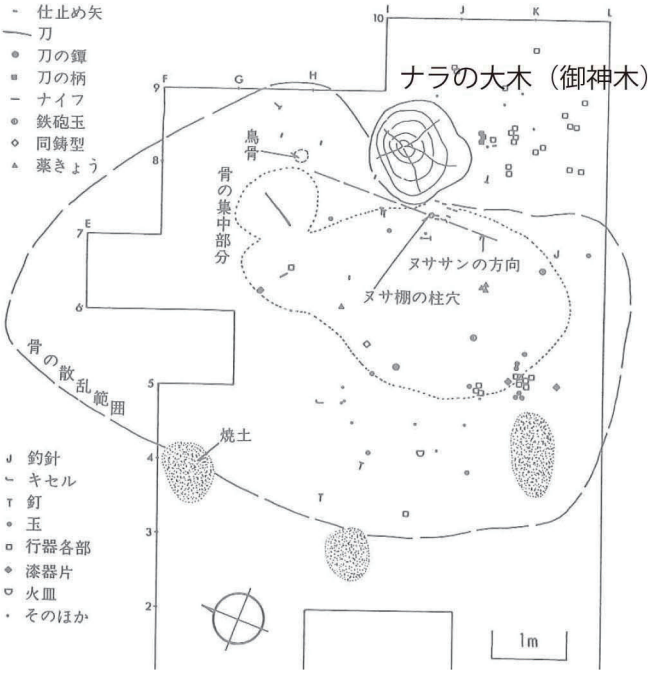


図８　大川添 (4) 遺跡（青教委 2014）



クマ、キツネ、ワシ、ウサギ、フクロウ、タヌキを送った。

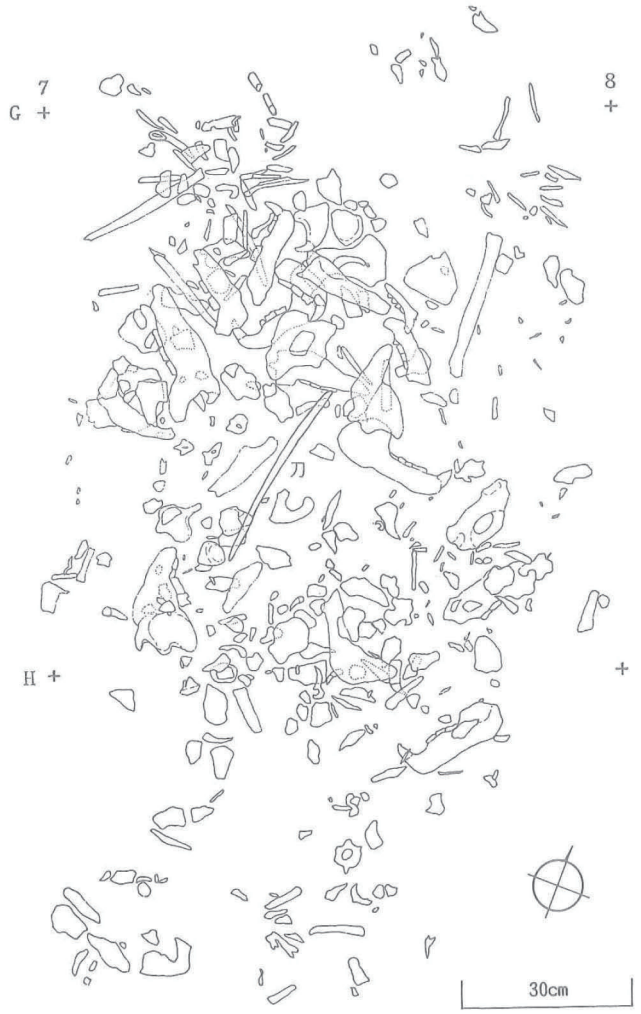


図９　北海道標茶町
シュワン送り場遺跡
明治初め～昭和 14 年
（宇田川2001に加筆）

写真１　御神木の周りに石が巡る

とはできなかった。今後、地域を広げてデータ収集を行うことと、類似資料の増加を待って改めて考察する必要もあるであろう。

発掘調査をしていると風倒木痕周辺に遺物が集中していることは何となく経験的に感じているが、見過ごしていることも多い。風倒木痕は撹乱であるという思い込みから、記録されない場合も多いように感じる。自分自身も含めて、今後の調査では風倒木痕も遺構の可能性があるという視点でみていく必要もあるであろう。

本稿では考古学的事例を青森県に限ってみてきたが、このような信仰は日本全国、ひいては世界中に存在するものであろう。今後、時代や地域を広げて考察することによって、さらに具体的な姿がみえてくる可能性がある。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、次の方々には大変貴重なご助言を頂きました。末筆ながら感謝申し上げます。

永嶋豊氏、木村淳一氏、斉藤慶吏氏、濱松優介氏

註

1) 信仰と祭祀はほぼ同義であるが、本稿では「信仰」は行為を伴わない概念で、「祭祀」は行為を伴うものとして使い分けている。つまり、「信仰を行う」とは言わず、「祭祀を行う」と言う。
2) 岩手県の芋田沢田Ⅵ遺跡にも類似の遺構が確認されている。
3) 遺構配置図における位置は特定できなかった。
4) 報告書では、地山の礫層が風倒木によって持ち上がったものであるが、一部作為的に配置された状態も見られるとされている。
5) 柳田が、境界の神である「サイの神」と解釈しているものと思われる。
6) 尾山・持寺集落、雨森・保延寺集落では、それぞれの集落が男神・女神と決めて、１つの場所に野神をまつり、２つの集落が同じ場所で同時に野神祭りを行う［李 2010：29-30 頁］。

文献

李春子　2011『神の木』サンライズ出版 .

エリアーデ , M. 著・堀一郎訳　1968『大地・農耕・女性』未来社 .

小川直之　2012「森神と神樹の信仰」『祭祀儀礼と景観の考古学』國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター：181-197 頁 .

キャサリン・コーリン他著・小須田健訳　2013『心理学大図鑑』三省堂 .

宇田川　洋　2001「標茶町シュワンの熊送り場」『アイヌ考古学・研究序論』北海道出版企画センター：287-289 頁 .

宇田川　洋　2001「アイヌ文化の送り場遺跡」『アイヌ考古学・研究序論』北海道出版企画センター：293-332 頁 .

萩原秀三郎　2001『神樹－東アジアの柱立て』小学館 .

福島　章　1977「第 4 章　精神分析学」『心理学のあゆみ』有斐閣新書 .

柳田國男　1990「神樹篇」『柳田國男全集』14　ちくま文庫 .

柳田國男　1990「石神問答」『柳田國男全集』15　ちくま文庫 .

ユング , C.G.　1975『人間と象徴』河出書房 .

吉岡政徳　1984「9 構造主義」『文化人類学 15 の理論』中公新書 .

青森県教育委員会　1988『上尾駮 (2) 遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 115 集 .

青森県教育委員会　2006『近野遺跡Ⅹ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 432 集 .

青森県教育委員会　2013『駒木沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 552 集 .

青森県教育委員会　2001『三内丸山 (6) 遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 307 集 .

青森県教育委員会　2008『石江遺跡・三内沢部遺跡 (3) Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第 458 集 .

青森県教育委員会　2014『大川添 (4) 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 542 集 .

（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2013『芋田沢田Ⅳ遺跡・芋田沢田Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第 604 集 .